

③ アンの魅力 世界で一番美しい島

正確な統計はないのですが、『赤毛のアン』は世界で日本人が一番熱心な読者の部類に入っているかもしれません。なぜこの物語がそれほど日本で読まれるようになったのか。またミュージカルの人気が衰えないのか……

それは、まず原作と翻訳がすばらしいことは当然として、誰をも魅了するアンのキャラクター、またマシュー、マリラの老兄妹がアンを育てることによって人間的に豊かになっていく変化、そしてプリンスエドワード島の美しい自然の描写にあると言えるでしょう。

島へ日本からの直行便はありません。2008年6月、私はまず成田からトロントに飛び、ここで50人乗りほどの小型機に乗り換え、東海岸にあるプリンスエドワード島の州都・シャーロットタウンに到着しました。



人口約14万人の島は「波間に浮かぶゆりかご」の形をしています。アンの育ったキャベンディッシュ（物語ではアボンリー村となっている）は、シャーロットタウンと島の反対（北）側にあり車で約40分の道のり。道路の両側には、赤土と緑ののどかな田園風景が広がっています。毎年、夏になると催されてきたミュージカル公演は、100周年のこの年は特に力が入っている、とのことでした。私も本場のミュージカルを鑑賞、終了後、主役のアンと準主役のマシューにインタビューしました。

本の中でアンは言っています。「プリンスエドワード島は、この世でいちばん美しいって聞いていたから、住んでみたらどんな感じか想像したものよ」（第2章 マシュー・カスパートの驚き）

孤児だったアンはマシュー、マリラの兄妹に引き取られると、目に映る周囲の木々や森、道路や湖水にも“想像力”を發揮して次々と名前をつけていきました。“腹心の友”ダイアナと通った「恋人たちの小径」

（写真右）は新緑のまっただなか。こぼれ日が路面に映り揺れており、高い樹木が密集した「お化けの森」では倒れた古木がいかにもその趣をかもし出していました。

「アンをめぐる旅」の基点ともいべきグリーンゲイブルズ（「緑の切妻屋根」の意）の家は、作者モンゴメリーの親戚が実際に住んでい

たものでした。現在は小説に書かれている通りに再現され、100年前の息づかいが感じられるようになっています。

中に入ると、アンとマシュー、マリラの3人がいつも語り合っていた一階の居間、台所。アンがダイアナを招待したお茶会で間違えてスグリ酒を出した食器棚。二階の東向きのアンの部屋には明るい色の少女用ベッ（グリーンゲイブルズ前のリンゴの花）



ドのほか、マシューがアンに贈った、袖がふくらんだパフスリーブの衣装もかけてありました。

可愛いおしゃべりとあふれる想像力



2階にあるアンの部屋

アンの魅力といえば、まずその可愛いおしゃべりでしょう。美しいものに憧れる乙女心。数え切れない失敗。それでも“想像力”を駆使し、決して希望を失わず、すべてに前向きに生きていくアンに読者は感動し勇気づけられます。

『赤毛のアン』を読んだアメリカ人の作家マーク・トウェインはモンゴメリーに、「the dearest and most moving and most delightful child since the immortal Alice」

(直訳すると「かの不滅の<不思議な国の>アリス以来、最も可愛らしく、最も感動的で最も利発な子」と絶賛の手紙を送っています。

これから紹介するアンの言葉は、最も新しい松本侑子訳からの引用です(現地訪問の前に5回ほど、私は青山で松本侑子講師が担当する「原書で読む『赤毛のアン』」の講座に出席していました)。

.....



「いいお天気の朝で、とても嬉しいの。でも雨の朝も、好きよ。どんな朝でも、ワクワクするわ。今日の日、これから何が起きるか、想像の余地があるでしょう」(第4章 グリーンゲイブルズの朝)

「私の経験から言うと、物事は楽しもうと思えば、どんな時でも愉しめるものよ。もちろん、楽しもうと固く決心することが大事よ」(第5章 アンの生い立ち)

ミュージカルの記者会見・マシューとマリラ

(マリラが)「・・・寝室は、眠るためにあるんだよ」

「まあ、マリラ、夢を見るためでもあるわ。美しいものに囲まれた寝室の方が、いい夢がみられるでしょう？」(第16章 お茶会、悲劇に終わる)

——楽しい言葉ですね。すべてを前向きにとらえ、人生を楽しみ、夢を広げていくアンの生き方がほうふつとしてきます。

またこうも言っています。

「人に謝って許されるって、ほっとして、気が楽になるわね。今夜は、星がきらきらしているわ」(第10章 アンのお詫び)

「明日は、まだ何の失敗もしていない新しい一日だと思おうと、ほっとするわ」(第21章 風変わりな香料)

——自分の失敗をすなおに詫びる純粹さ。また失敗の多い日々の生活のなかでの乙女のやさしい心に読者は親近感を抱き、さらに、明るく毎日を生きようとするその考え方を、



ミュージカルのアン(右)とダイアナ

自らの人生に取り込もうとするでしょう。

一方、ときどき出てくるアンの無鉄砲さは夏目漱石の『坊ちゃん』をほうふつとさせるものがあります。正義感にあふれ、負けん気の坊ちゃんは「そこからは無理だろう？」とからかわれ、二階から飛び降りて怪我をしました。アンはダイアナの家のお茶会で、仲間とのひよんな駆け引きから、引くに引けず、屋根の棟(むね)を歩き、転げ落ちて足首を骨折してしまったのです。

そのほか、ちょっとした取り違えで、“腹心の友”ダイアナにお酒(果樹酒)を飲ませてしまう話。小船に横たわって川に流されていくお姫様のまねをして溺れ死にそうになり、“心の敵”ギルバートに救出される話など、エピソードに事欠きません。このように日本文学の傑作に類した点があるのも、親しみを感じるところなのでしょう。

最終章——競争の激しい大学への奨学金試験を勝ちとり、洋々とした前途が開けた矢先にマシューの突然死と、グリーンゲイブルズを手放さなくてはならないというマリラの苦悩……。それを知ったアンは、ここまで育ててくれた二人への恩と愛情に、進学をあきらめ村に居残ることを決めます。成長したアンの言葉が つむがれていきます。



「楓の國」——6月なのに赤い

「クイーン学院を出た時は、私の未来は、まっすぐな一本道のように目の前にのびていたの。人生の節目節目となるような出来事も、道に沿って一里塚のように見わたせたわ。でも、今、その道は、曲がり角に来たのよ。曲がった向こうに、何があるか分からないけど、きっとすばらしい世界があるって信じるわ」——そして道には、いつも曲がり角があり、そのむこうには新しい世界が広がっているのだ！——(第38章 道の曲がり角)

——本書のテーマを象徴する言葉とも言えるでしょう。いつも希望を捨てない、明るい未来を信じ努力していくアンの生き方に、物語の読者またミュージカルの鑑賞者は勇気づけられていくのです。



島では3組のカップルがポーズをとってくれた